



発行所 津市新町3丁目1-1 津高等学校 同窓会事務局 0592-28-0256 共立印刷株式会社

津高の新しい未来に向かって.....	2
東曲同文書院と私.....	3
私の津中時代.....	3
心豊かな熟年生活を.....	4
校長先生に感謝.....	4
あの時代こんな青春.....	5
あこがれの神宮球場.....	5
地獄と救済.....	6
全国総体六位入賞.....	6
進路さかいわい.....	6
異動.....	9

奮ひて起る時は今ぞ



早や年末を迎えることになりましたが、会員の皆様には、ご清祥のこと存じます。

恒例の八月の総会パーティも五百数十名の参加があり、盛會裡に

このたび本部では「津高同窓会報縮刷版」を発行いたしました。

同窓会長

辻 嘉一 (昭和10年卒)

ご挨拶

学校長 井坂 剛



絵 「T子像」 駒田 春子さん (昭和35年卒)
タイトル・書 千草 洗洞氏 (昭和23年卒)



今、津高は、新たな転換期を迎えようとしております。学校間格差に伴う過度の受験競争の弊害を是正するために、昭和四十九年度から導入された総合選抜制度(学校併合)が、いよいよ平成六年度をもって終止符を打つことになりました。学校併合の廃止は、最近の中学卒業生数の減少による受験競争の緩和、受験生の希望を生かした学校選択の自由の保障、学校の個性化、特色化の推進なら、社会状況の変化に対応する適切な施策であると考えます。

本校では、単独選抜となる平成九年となることとなります。ざっと目を通し、恩師の先生方、諸先輩の御顔が髣髴として蘇って参ります。ともあれ、本書には同窓会の成長過程が詳述されております。温故知新、若い方々の一読をぜひおすすめする次第です。

一、私は津高に約九年間在籍(津中約三年と津高六年)し、お世話になった。この不肖の記録は、将来破れることはないし、過去にも数える程しか例を見ないであろう。それは、津高二年生の直前、助産で休学中途中葉粒結膜で死線をさま迷った事に端を発する。一年後復学したものの飛火してカリエスに罹りギブスベルトに寝た切りの入院生活を強いられた。加えて二年目の復学直前ストマイの副作用の激甚な目まいに襲われ、ついに首を左右に動かすことができず不治の宣言を受けて更に一年寝た切りとなり、都合三年間休学の憂目に遭ったからである。その間味わった苦悶は筆舌に盡くしがたい。今思ってもぞっとするよつなトラブル続きの青春であった。

かくして津中以来の米本先生はじめ諸先生の暖かいご支援を背中に感じながら、松葉杖が取れ、一本杖もいらなくなり、コルセットだけになって無事在籍九年の津高の生活にヒリオドを打った。



笠井達也 (昭和21年入学 昭和30年卒業)

よう元気になったな

在籍九年間の津中・津高

私、本年六月の代議員会で、会長に三選されました。もとより微力ですが、同窓会発展のため任期一ぱい頑張って行きたいと存じます。一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

最後に会員皆様のご多幸をお祈りしまして筆を擱きます。

丁度コンクリートの通路をわたっている時であった。ふと松葉杖を休め顔を上げると、五、六メートル先から津中以来のあのジャッパさんが私の方に満面笑みを湛えて駆け寄って下さるではないか、と思う間もなく先生は、杖を脇に挟んだ私の両肩に手を当て抱かばかりの御様子で「笠井、よう戻って来た。よう戻って来た」とお顔をくしゃくしゃにしておっしゃった。そして更に「さあ元気になったぞ、よかったよかったと喜ぶ下さった。私は国語の不出来生徒であったことも忘れて「先生、僕もお会い出来て嬉しです」と言いたかったが、もとの声は出なかった。ただ米本先生の御慈顔が私の体の中を駆け廻り熱いものが込み上げてくるのを覚えることもできなかつた。そして心の底から嬉しかった。

(名古屋法務局長)

津高の新しい未来に向かって

津高校教諭 青山雅樹（昭和44年卒）

一、学校群制度の廃止と特色ある高校づくり

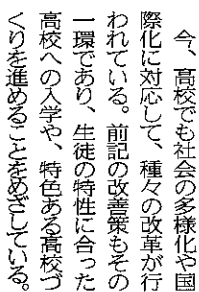
この度、県立高校の入試制度の改善が決定された。主な改正点は、推薦入学が拡大されて、理数科や一部の普通科でも実施できるようになったこと、三学区に分かれていた普通科・理数科の一部が全県一区、つまり全県から受験できるようになったこと、学科やコースの特色に応じて試験の配点をかえる、いわゆる傾斜配点ができるようになったこと、調査書にボランティア活動歴なども書くことである。これに基づいて、各高校の来春の入試要項が決定される。

しかし、本校にとって何より重大な改革は、総合選択制いわゆる学校群制度の平成七年入試からの廃止である。現在の中学二年生から再び津高単独入試となり、二十一年に及んだ群制度の歴史を閉じることになった。第群のパートナーである津西高校を別れて、ともに独自の学校づくりをめざすわけである。百十一年の津高の歴史にまた新しい時代が訪れようとしている。

二、群各校の対応と「津高を考える小委員会」

一つは高校改革の動き、特に群制度の廃止とその後について、三つの群の各校はどう対応しようとしているか。

群解消は特色ある高校づくりの理念とともに、現実には大学進学成績の強化をはかって、一校集中を意図するものである。進学校として際立つことも特色であるといえる。進学校として、競争しながらも共存してきた各群の二校に、進学率の面では差がでるようになっていく。それをねらったと世間では理解している。



動きが早かったのは一群の四日市・四日市南の両校であった。その議論の過程は私も他校の教員にはわからないが、群解消に先立つ来年度から、四日市南高に「数理科学コース」、四日市南高に「数理科学コース」が設置されることになった。各「コース」一学級分の定数は、各校独自で選抜する。推薦入学はまだ実施されないが、南高のコースでは数学二倍の傾斜配点を実施する。

学・就職などのコース選択を設けるものと異なると、制度的にも、内容的にも新しいものである。さらに来年度、普通科と専門科を合わせて、多様な科目選択を可能にした「総合学科」も設置が決められている。しかも、普通科が主であった高校にも、理数・英語・体育・情報科などを併設している。

特色ある高校づくりは普通科も例外ではない。来年度には普通科において第一学年から「コース」を設け、選択も行う高校が四校ある。「国際コース」・「体育・スポーツコース」などである。このコースとは、各校が自校のカリキュラム編成の中で、二年からあるいは三年で文・理、国公立・私立、進

二つは制度的な面をとりあげたが、特色ある高校づくりはその中身にあることはいささかもない。各校とも授業、諸行事、特別活動、生活指導、進路保障など多方面にわたって独自の工夫を行おうとしている。



三つの群の動きを聞かなかったのは三群の伊勢高・宇治山田高である。将来はともかく来年度すべしという制度改革はないようだ。

さて、わが二群では津西高校が独自のコース設置をはかったが、認められず、前記の来年度の改革中にはあらわれなかった。しかし、群制度廃止決定を受けて、将来の学校づくりのために熱心な議論が重ねられたと聞いている。

津高でも、いっしょに一群や津西高校の動きにあおられた感はないではないが、このたびの改革に對する何らかの対応と、津高の将来像を考えることになった。

そこで、「津高を考える小委員会」が設置され、ここを中心に今後の方策が打ち出されることになり、先ず基本方針が討議された。既に他校における「コース制」や推薦入学導入案などの頭が耳に入ってきた。また津高も教員、来年度からの新指導要領に基づきカリキュラム作成の中で、文理のコース分けや、それによる科目選択の限定（受験科目にしよう）なども検討していた。しかし、委員会と職員会議の結論は、「特別なコースなどは設けず、これまでと同様な全員一様のカリキュラムで、全人的な教育を追求すること」であった。つまり、一・二年次は一部の教科における科目選択はあるが、基本的に同一のカリキュラムで偏りのない教育をめざし、三年次は幅広い科目から自由に選択して必要な単位数を満たし、一人一人の多様なニーズに応じて進路を保障しようとするものである。

する何らかの対応と、津高の将来像を考えることになった。

「小委員会」では基本方針を出すにあたって、教員ばかりではなく、同窓会やPTAの方々にもアンケート「津高の将来像をもとめて」を実施した。時間的な制約があり、各々一部の幹事・役員の方々に協力いただいた。「小委員会」の座長の方々がまとめたものを一部紹介したい。



「長い伝統と高い学力レベルの進学校。管理教育でなく、自主・自律を重んじている」「伝統に培われた自由を重んじる建学の精神」といった点に感じる津高の誇りは、教員とも同様である。

現在の津高生や津高の教育については、「管理教育的でなく人間教育を重視する校風の中で、生徒は自由で自主的な雰囲気とプライドを持っている。一方、「全人教育」とか「自主自律」の名のもとに、反面、受験に対する厳しさ、きめ細かい教育をして頂いているのではなか。」「津高生はあまりにも塾通いの生徒が多いのが気がかりです。もっと学校で勉学なり、運動なり頑張してほしい。」「基本的な指針をいただきたい。」「今後の津高のあり方について、従来の自由、自主・自律の校風

「小委員会」では基本方針を出すにあたって、教員ばかりではなく、同窓会やPTAの方々にもアンケート「津高の将来像をもとめて」を実施した。時間的な制約があり、各々一部の幹事・役員の方々に協力いただいた。「小委員会」の座長の方々がまとめたものを一部紹介したい。

「長い伝統と高い学力レベルの進学校。管理教育でなく、自主・自律を重んじている」「伝統に培われた自由を重んじる建学の精神」といった点に感じる津高の誇りは、教員とも同様である。

四、意欲的な生徒会活動

生徒たちはどう考えているのであろうか。現在の生徒の状況が、自ずと将来の津高生を語ってくれてはいないだろうか。生徒会活動を紹介したい。生徒会活動の例として紹介したい。最近の高校生の無気力や無関心などといわれる中で、津高の生徒会はその風潮とよく闘いながら、自由で自主的な活動に取り組んでいる。いっしょに本年の活動状況をあげると、まず「公開討論会」がある。「学習環境を整える」と「群解消の津高」をテーマに、生徒代表（生徒会役員と生徒有志）と教員代表（主要分掌主任と生徒が希望した教員代表）の十数名の討論会を、全校生徒・教員の前で行った。両者の生徒同士が、正々堂々と対等に語り合う場面は、最近にはなかったことである。

また、代表の「東海地区ハイパー大会」出場や、これを受けた校内大会と講演、あるいは「乗鞍高原サマーキャンプ」という研修会などの行事を通して、リーダーの育成をよりよく知ってもらおうと、生徒会も中学生のために、生徒自身の手になる学校案内のパンフレットを作成した。自らのアイデアでこうしたことができるのも津高らしさであろう。

「津高の教育」というものを広い視野で考えていきたいし、同窓の方々の一層の「理解と」助力をお願いしたいと思う。そして、「ポート大会」などのような、同窓生の津高と、現役生の津高が一層になる場が設けられて、それを津高らしい教育の場として大切にしたいと感じている。

※写真提供 ウェダフォトスタジオ



五、伝統の継承と将来のために

昭和三十年時代の津高新聞や生徒会誌「沖」に、すでに津高の予備校化を批判する記事がたびたび出ていた。塾通いの多い今の生徒たちの思いもそれは変わっていない。生徒会の公開討論会でもそれが確認されたと感じた。

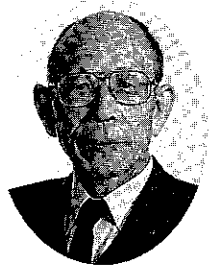
要は制度の改善よりも、教育の中身である。それだけに教員に求められることが多い。アンケート中には、「伝統にあぐらを掻き、自主自律の名のもとに何もしていない」という批判が少なからなかったが、その指摘も無理はないと思う。我々が一律に生徒の自主性に期待し、任せるだけでは批判の通りである。一人一人の個性・特徴をしっかりと把握し、各々にあったきめ細かい指導が大切だ。

卒業時の生徒の感想に「津高でよかった。先生は干渉せず、自分達の思い通りにやらせてくれた。」「というものと、「先生は何もしてくれなかった。」「という両極がある。本当の自主性を育てるためには、学習面でも生活面でも表に現れない教員の努力と互いの信頼感（保護者との間にも）が必要である。津高に対する思いは、現役生徒、教員、保護者、また同窓生、各々のものがある。同窓の方々はその世代に応じて、それぞれのものがあろう。また一人の人生の中でもその時々思いがあることと思う。現役の生徒には、伝統は重宝であつたり、あるいは身近には感じられないかもしれない。むしろ、卒業後にその素晴らしさを実感することが多い。また仕事をしたり、三重県内外に広く活躍したりして、同級や先輩・後輩との再会や新たなつながりができ、各々の「津高」が広がるものである。「津高の教育」というものを広い視野で考えていきたいし、同窓の方々の一層の「理解と」助力をお願いしたいと思う。そして、「ポート大会」などのような、同窓生の津高と、現役生の津高が一層になる場が設けられて、それを津高らしい教育の場として大切にしたいと感じている。

だが、現在の受験体制のもとではなかなか困難だ。私立高校のように徹底した受験体制を敷くことは、ある意味ではたやすいことだ。しかし、今も昔もそれを否定して

東亜同文書院と私

尾藤 昇 (昭和13年卒)



「崑崙の峰より落つる万里の流れ……」

思い出多い私共東亜同文書院の校歌冒頭の一節である。崑崙千仞の高さ、長江万里の流れに、中華千古の歴史が偲ばれる。長江河口の都市上海に東亜同文書院が創設されたのは今を去る九十三年前廿世紀開幕の年であった。

当時の中国は阿片戦争以来欧米列強の侵略の前に累卵の危機を呈していた。明治の維新を成し遂げ、近代国家への歩みを進めていた我が国としても、呻吟する隣国の行方に関心と憂慮を抱いていた。列強に遅れじと大陸侵攻を心掛ける一部軍部の勢力もあったが、反対に中国の保全と興隆こそ東洋並

に日本の平和に繋がることの認識の下に、日中修好を念願した先覚の志も数多くいた。

中国の保全を希求し、新しい中国の政体を待望し、日中の共存共栄を願望した明治の先覚者の中に近衛露山公、荒尾東方、根津山州がいた。三氏は共に日中協力の方途として、両国が必要とする人材の養成こそ急務であると力説して両国朝野に訴えた。時の雨江総督劉坤一も三氏の建学の理想と情熱に共感し、配慮と支援を惜しまなかった。租界の外に外国の学校を開設することは、当初から極めて困難とされていたが、これを成し得たのは先覚三氏の説得力がいかにか大きかったかを物語るものである。かくて、全国各府県を対象に給費生の募集が開始された。北海道から沖縄に至る広範な地域から、大陸に夢を抱く日本の若者が笈を負って大陸に渡った。私も三重県から派遣された給費生の一入であった。当時の私は大陸に対しては、淋しい限りである。

人生雑感

北川 智一 (昭和18年卒)



私は本年九月に満六十八歳の誕生日を迎えた。六才で母を、十二歳で父を失った私は父母の分まで長生きをさせてもらった感が強、手を合せて両親に感謝したい。

私の人生を振り返ってみると、大きく三つに分類できる。

第一はひたすらお国のためにと頑張った海軍での人生である。風運急を告げる昭和十七年十二月一日、海軍兵学校第七十二期生徒と

して入学、わずか二年八月月ではあったが、まことに充実した兵学校生活であった。ここで得たものが大きなバックボーンとなって私の後の人生の全半を支配することになった。その中でも特に「五省」はその代表であろう。

一、至誠に情なるなりしか
一、言行に恥づるなりしか
一、氣力に欠くるなりしか
一、努力に懈みなりしか
一、不精に巨るなりしか

いつもこの「五省」が私の頭の中を、いや身体の中をかき巡っている。

戦後江田島を接収した米國アナポリス出身のエリート下士官が

校内は外国人教授の外は全寮制で、選挙で選ばれた学生自治会によって運営され、戦時下にもかかわらず、極めて自由闊達であった。

卒業前年の夏には、中國政府の許可証を受けて、中國各地の調査旅行が行われる。その報告書が卒業論文となるわけで、大旅行こそ四年間の学業の集大成であった。中国人の生の生活の中に飛び込んで生活を共にすることは、大陸で働くとする若者にとっては、この上ない経験で、将来の自信ともなった。私共は戦時下であり、大きな制限を受けざるを得なかったが、昔は新疆、四川、雲南等の奥地に半年の歳月をかけて旅行した先達もいたと聞いている。

創設から敗戦に至る半世紀の間に、五〇〇〇人に及ぶ人士を世に送り出した同文書院も戦争の終結と共に、その数奇な歴史の幕を閉じることになった。現存する同窓は一五〇〇名で、年々その数も減っていく。何れは学校と共に、この世から姿を消して行く運命にあることは、淋しい限りである。

母校はなくなったが、幾多先輩諸氏が日中友好親善に傾けた情熱は現在未来に活かしたいものだと、思っ、昨今である。

「五省」の素晴らしい意味を聞いて感銘し、後日彼がアナポリスの校長となるや、これを学校の各所に掲げたことである。現在のアメリカの兵学校にも「五省」が生きている。

ついで私の第二段階の人生が始まる。復員業務を終えた昭和二十二年から昭和二十三年までの四十一一年間の実業界活動である。木材・住宅関連一本槍で無我夢中で働きました。まず最初松阪で友人経営の製材工場に役員として入社し、戦後の住宅復興のため頑張った。しかし海外進出が貿易関係にどうしても進みたくて、役員ポストをすて、給料半分の平社員覚悟で上京した。最初の目標が運転免許・英・英・英・英・英のマスターであった。

夢のいくつかは実現しなかったものの事業は着実に発展し、今から

この第三段階は平成の年号と共に始まり、早や五年が経った。体操の小野喬・清子両先生に、次男を選手に育てていただいた縁で妻と共に二人のスポーツクラブに通い、日曜日は体操・バレエ・水泳等を続けている。

又二十一世紀を担う子供達を一人でも多く育成し、次代へ奉仕・友愛・責任・忍耐・進取のお當場精神(兵学校の校訓)を伝えるべく努力している。

命ある限り、昭和・平成の良き時代に生を受けたことに感謝しつつ一日一日を大切に精一杯生きて行きたいと思う。

私の津中時代

土村 栄一 (昭和20年卒)



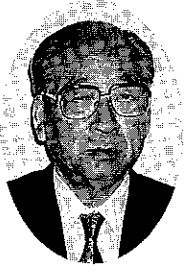
守ってほしい」「敬礼の挨拶をしないのはけしからん」と散々叱られた思い出があります。

又、その頃は、学校内の自治は上級生が担当しておりまして。週番と言う役割があり、放課後の掃除の検査も結果によっては、再度やり直しを命じられることもありまして。又、説教と云ふルールもあり、「何年何組今日は残れ」と上級生から言われると下校出来ず、上級生の説教が始まります。大勢の上級生が教室の後ろに陣取り、一人が教壇に立ち、「この組は最近だんである」とハッパをかけるのです。後から横面を張られても振り返る事も出来ず張られっぱなしでした。

上級生になり、週番担当の頃の事でした。ある下級生が授業をサボっているのを気付かずに注意をしました。内容が悪質であったので竹刀でめった打ちにし、顔面が青地になるまでしぼりました。親が気が付いて学校にどなり込んで来たので、私達週番担当者が慌て出されました。いきさつを聞かれ、一部始終を説明したところ、下級生は

津高卓球部と私

後藤 裕文 (昭和16年卒)



戦後の教育改革の一環として、新制高校が発足した昭和二十三年から四十二年まで十九年間、津高の教師として、さまざまの校務を分掌し、いくつものクラスを担当して来たが、この間一貫して担当してきたのは、日本史の授業と卓球部の顧問であった。世間「何かバカ」といふ言葉があるが、これ何と云う執念であったのか、と今更ながら呆れかえっている。

ふり返ってみると、二十歳代の後半から三十歳代の全部を通して

四十歳代の初めまで、放課後と休日には「卓球のコットン」の毎日であった。寒い冬ともなると木枯しの吹き荒れる夜、凍える体育館から暗い渡り廊下を引揚げて来て、よく同僚の先生や用務員さんに「宿直ですか」と問いかけられたのも懐かしい思い出である。夏ともなると、合宿のシーズン一時に自宅を開放して、選手たちと寝食を共にする毎日の連続……日曜日は決して平日よりも早く起きて試合会場に駆けつけ、マナー・ムシをなめて、そのまゝのことと割り切っていた。

諸事温和と中庸をよとせるといふ重厚で、マナー・スポーツと言われ、卓球に打ちこんでみたところ、でさしてむづかしいものはな

即刻退学、私達は三日間の謹慎を命ぜられた事が思い出されます。校内の自治に対しては、上級生の權威は相当なものでありました。恩師としては、中岡道長先生、確かアタ名は「バク」さんが思い出されます。当時の船舶兵とか予科練等への志願兵制度があり、私も若気のいたりで中岡先生に相談に行つた事がありました。その時先生は私の家庭状況をきかれ、そんなに急いで行くことはない論じられた事柄が痛く思い出して残っております。

戦時色が強まる中、いよいよ爆撃が始まり、B29が飛んで来る様になりました。生徒動員が始まり、私達は三重工業へ行くことになりました。そこでの入所式で初めて三重県立津高女の女学生と一緒になり、それまでの通学電車も男女別々の時代に、おぼろしい感情が流れたのを覚えております。生徒動員当初は軍事教練のみ学校で行われていたのですが、その内、軍事教練も工場でもやる様になりました。次第に生徒動員も本格化した。私達までも昼勤と夜勤が実施され

いものの、中学でラケットの握り方も知らずに進んで来た生徒達を、大学進学競争の重任に抗して鍛え上げ、インターハイや国体選手にまで練り上げてゆく、その「生きがい」と「教訓」こそ、部活指導者としてかけがえのない貴重な体験であったと思う。その体験の中から「三つ」とり上げてみたい。

第一に、部活それ自体の教育的価値はさておいて、運動部はやはり強くなりたいいけないところである。部員には上手でも弱い者があり、下手でも強いものがある。上手下手は素質にもよるが、下手でも強い選手になれば、進学校で運動部をやる効用はこれしかない。それが身につけば、技量はものにならなくても、部活で培った値打ちはある、と割り切った。部員たちを叱咤激励した。

叱咤激励といふけれど、選手に手を振り上げたのは一度もない。腹が立つことは間々あっても殴つ

る様になりました。爆撃が度々行われる様になると、私達学生は警戒警備で、津海岸まで退避しました。工場が爆撃に合い戻って来ると、顔見知りの工員さんがいなくなっており愕然とした事が胸に焼ついております。又、東海大地震の時はどこかの大煙突が折れ、後片付けに汗を流したのも思い出の一つです。

当時の機械工員は何んでもこなさなければならず、ボーリング、シェーパー旋盤、その中でも最もむづかしかったのは筒の内ねじ作りで、私達もそれをやらされました。

終戦が近づいた頃にはB29もいよいよ低空で飛ぶようになりましたが、銃撃だけでは撃墜できないので、戦斗機の下に銃撃できる装置を作り、B29の上から秒単位で連続して発射する練習が作っていました。生徒動員で作ったものでアメリカとの戦いにいどんだ事に無理があった様に思われますが、今にして思えば良く生き残ったものだと感謝している次第です。(三重交通(株)社長)

第二に運動部の顧問はその道の練達者でなければなりません。しかし部活で最終的に問われるのは技術ではなく人間そのものである。その点から部活指導では頂点よりレギュラーの末端、補欠選手との境界あたりに目を注ぐことが大切であったと思う。

第三に練習場のことであるが、その点津高は比較的恵まれていた。ただ昭和十七年の火事はショックであった。しかし部員たちの創意と努力で乗り切ることができた。この時図らずも「家賃」にて孝子出「の」の諺に思い至った。それと共に津高の伝統の重さを痛感した次第である。

心豊かな熟年生活を

三重桜部会長 佐々木 かよ (大正15年卒)



きた天野清子さんが勇退され、昭和十一年卒の光澤庄子さんがあるとお引受け下さいました。名古屋支部は引き続きかよさんと、共に年度別の実行委員会をもち、心のこもった計画で楽しく歌ったり、ゆつくりとお話合いですることもできました。

三重桜部会長も大正、昭和、平成と家庭、社会の大きな移り変わりの中で多くの苦労や喜びを経験し、いよいよ高齢期熟年を迎え、ほっとさせた心境で母校時代の生活や友達がなつかしくなるのでしようか、総会でも懇話会にも年々参加者が増えて生き生きとした話はずみです。

今年九月二十七日に東京部会十月二十五日に名古屋部会が開かれ、更に十月一日には久居支部が新しく発足し、いづれも盛況で楽しいひとときを過ごさせて下さいます。

三重桜総会の報告

平成五年度の総会は、陽春の四月十一日(日)津都ホテル伊勢の間で開催された。県内外各地からの参加者一七六名。来賓として辻同窓会長、岡村副会長(津市長)、富島副会長、井坂津高校長、恩師松岡先生、事務局・阿比子先生、松井先生にご臨席頂き盛大な集いとなった。

平成6年度三重桜総会案内

とき/平成六年四月二十四日(日) 十一時三十分より
ところ/津都ホテル伊勢の間
会費/五千円
備考/日程等詳細については後日年度幹事を通じて連絡いたします。

校長先生に感謝

天野 清子 (昭和3年卒)



私が津高女に入学したのは大正十三年、当時の校長は清水誠吾先生でした。女子の健康を大切にされた先生は、全校生徒に自衛術を指導して下さいました。それから毎月一回の月次遠足、ふだんの話し声や会場一ぱいに広がり時の話つのも忘れる雰囲気であった。

した日々を過ごしていらつしやることに深い感動を覚えました。私達は「汲我隨順を美德」とする女大式教育の時代に育ちました。しかし清水校長の「質実剛健」の「張り、気品」の教育は時代を超えて會員の心底に生き、生涯学習、ボランティア活動が重要と

お話等々、それぞれ立場は違っても皆さん長い人生経験を無駄にせず、家庭で地域社会を明るく充実

した日々を過ごしていらつしやることに深い感動を覚えました。私達は「汲我隨順を美德」とする女大式教育の時代に育ちました。しかし清水校長の「質実剛健」の「張り、気品」の教育は時代を超えて會員の心底に生き、生涯学習、ボランティア活動が重要と

まの恰好でお弁当だけ持ったの速歩きです。時は早くて嫌だと思つたこともありましたが、満八十二歳の今日、脚が丈夫で歩く速さも若者に遜色なく何処へでも歩いて行ける健康は、あの鍛練のおかげと心より感謝しています。

その次の校長は、佐々木二郎先生、津中の英語の先生であられた時、私の兄も教えるようになりました。昭和三年、卒業も間近になった頃

今想うこと

北泉 肇子 (昭和18年卒)



戦後、津市は大きく様が変わりました。戦後の教育改革においてわが県立津高女学校も、その例に洩れず、男子校の名門である津中学校と合併し、新制津高等学校になりました。

戦後、津市は大きく様が変わりました。戦後の教育改革においてわが県立津高女学校も、その例に洩れず、男子校の名門である津中学校と合併し、新制津高等学校になりました。

戦後、津市は大きく様が変わりました。戦後の教育改革においてわが県立津高女学校も、その例に洩れず、男子校の名門である津中学校と合併し、新制津高等学校になりました。

思い出

竹田 綾子 (昭和17年卒)



一年生の七月盧溝橋事件、五年生の十二月には太平洋戦争開戦、津高女の思い出は国家総動員法下にあると戦争に繋がっている。教育内容はすべて皇国史観そのもので道徳の規範は教育勅語のみであった。三年生の時、皇紀二千六百年奉祝で、満州国皇帝がお祝いのため訪日された。国語の先生の助言で教員が奉祝作文に応募し、偶然私が一位になりNHK名古屋から作文朗読を放送された。大東亜新秩序の建設・王道楽土・五族協和などのスローガンが幻影でしかなく、今は今こそ明らかであるが、当時の私達には疑問をさしはさむ余地など全くなかった。すでに言論統制が進んでおり、体制を批判するものはない、私達の目にみれば、それはなかった。従って私の作文も皇国史観を忠実になぞったものだった。学校中が軍国少女の集団で日米開戦直後の一月には学校中の献金・慰問文・慰問品をもって高畑校長と長井先生に引率されて四、五年の代表二名が鈴鹿の海軍航空隊を訪問したこともある。あの時おあいした何人かが三年後に沖縄で玉砕されたとは誰が予想し得たであろうか。日本中が緒戦の戦果にわいていた時だった。

昭和十七年三月、私は卒業して素晴らしい友に出あえたからで、今、社会の変化と共に教育も大きく変革されようとしています。学校週五日制、生涯学習等の推進によって、学力至上主義が崩れようとしています。成績だけにこだわる教育は如何にも寂しい気がし

昭和十七年三月、私は卒業して素晴らしい友に出あえたからで、今、社会の変化と共に教育も大きく変革されようとしています。学校週五日制、生涯学習等の推進によって、学力至上主義が崩れようとしています。成績だけにこだわる教育は如何にも寂しい気がし

昭和十七年三月、私は卒業して素晴らしい友に出あえたからで、今、社会の変化と共に教育も大きく変革されようとしています。学校週五日制、生涯学習等の推進によって、学力至上主義が崩れようとしています。成績だけにこだわる教育は如何にも寂しい気がし

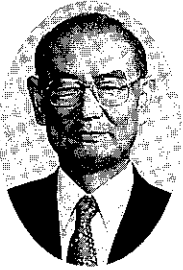
昭和十七年三月、私は卒業して素晴らしい友に出あえたからで、今、社会の変化と共に教育も大きく変革されようとしています。学校週五日制、生涯学習等の推進によって、学力至上主義が崩れようとしています。成績だけにこだわる教育は如何にも寂しい気がし

昭和十七年三月、私は卒業して素晴らしい友に出あえたからで、今、社会の変化と共に教育も大きく変革されようとしています。学校週五日制、生涯学習等の推進によって、学力至上主義が崩れようとしています。成績だけにこだわる教育は如何にも寂しい気がし

昭和十七年三月、私は卒業して素晴らしい友に出あえたからで、今、社会の変化と共に教育も大きく変革されようとしています。学校週五日制、生涯学習等の推進によって、学力至上主義が崩れようとしています。成績だけにこだわる教育は如何にも寂しい気がし

あの時代「こんな青春

川喜田 貞久(昭和27年卒)

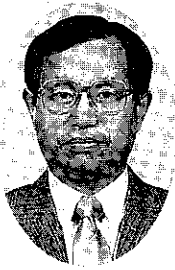


卒業から四十一年以上経った。今年には還暦の年だ...

この時代は国民学校に入学し敗戦は六年生。剣道、柔道も正課として教えられた...

津高剣道部創設の頃

三浦 信一(昭和32年卒)



私は二十九年四月に津高校に入學しました。当時津高校には剣道部はなく、勿論正課の授業はありませんでした...

三学期もやっとなりに近づきながら、参加者が多く、入部希望者が...

Main body of the article containing multiple columns of text, including a section about '重品の砂糖をまぜて飲むとか、ヨモギの葉を巻いて煙草にするとか'.

ニュージーランド・オーストラリアの教育現場を視察して

西口 佳子(昭和42年卒)



あこがれの神宮球場

黒川 和哉(平成2年卒)



Main body of the article containing multiple columns of text, including a section about '十三日から十六日間ニュージーランド・オーストラリアの教育事情を視察する機会に恵まれた'.

地獄と救済

(平成五年同窓パーティー記念講演より)

小南 一郎 (昭和35年卒)



「地獄」を心の問題だとした。また「地獄」や「極楽」は、どこか別のところにあるのではなく、おまえの心の中にあるのだと説きました。あるいはまた「地獄の責め苦」は悪事を為さぬよう戒めるために考え出されたものだと説明した。しかし、そうした唯心論的、あるいは功利主義的説明は「地獄」や「極楽」を信じつつ生活してきた人々の心を十分に、とらえていないでしょう。

仏教儀礼では、葬儀のあと、七日から始まり七日まで七回の法事をいたします。これは、「死者は七日ごとに生まれ変わる機会がある。七日までの間に、その機会を捉えて法要をすれば良い」ところに生まれ変わる」という、インドの伝統的な観念を基礎にした行事なのです。

元来の観念では、七日までの間に全ての人がどこかに転生してしまうのであって、それ以後の法事は無意味なものであったのですが、中国において、この七回のほかにも百日と一年目、三年目の法事が加わって、十回の供養が行なわれるようになった。日本における近代の仏教者や思想家たちは、

なぜ人間の精神生活には、必然のようになっている「地獄」が伴っているのでしょうか。

近代の仏教者や思想家たちは、

同窓パーティを担当して

伊藤 洋之 (昭和47年卒)



今回、計らずも学年代表という

大役を拝命し、また、それを四十七年卒のメンバーが大勢、支援をしてくれて、本当に感謝にたえません。心より御礼申し上げます。

それは色々苦勞はありましたが、やはり一番よかったのは、この事業を通して同級生がひとつにまとまり、また、旧交を暖めることができたことに尽きます。実際、二十二年振りに会うことのできたクラスメイトも結構おりました。また、卒業して長い年月がたつたわけですが、今回の役割をいた

だしては、さらに七回忌、十三回忌、三十三回忌が加わって、十三回の死者供養が組織化されました。しかもそうした死者供養には、十回の供養に対する地獄の十王、十三回の供養に対する十三仏と、それぞれの供養に対応する地獄の支配者(そのからの救済者)が想定されていたのです。

地獄の支配者である「閻魔王」は、インドのペータ神話のヤマ王に起源します。このヤマ王は、人類最初の死者であり、あとに続く死者たちの行へべき道を示したとされます。ヤマが中国で音訳されて閻羅、閻摩、焰摩、閻魔などと漢字で表記されたのです。

仏教図像の中でも古い様相を留めた閻魔王の像は、密教系統のもので、そこでは閻魔王は、左右に人頭を乗せた幢を持ち、水牛に乗っており、また、その背後には、私達が知っている閻魔さんとはかなり違っています。

私達がよく知っている閻魔さんは、実は純粋に仏教的なものではなく、中国の民間信仰を取り入れた、十回の死者供養に対応する地獄の十王の一人としての閻魔王

について、改めて津高OBとしての自覚、責任、プライド等を持っていただくことが、本心から思っています。

そして、本心に身をこめて関わったのは、三十五年卒の先輩たち、親しく接していただき、本当にご配慮をいただいたことです。十二年の差のある先輩、後輩で担当というのは誰の知恵かわかりませんが、このご事情でもなければ縁のなかつた先輩たちと親しく接することができて心より感謝申し上げます。

とにかく、今後、担当される年度の皆様、やればよかったんだけは必ず満足が得られますので、是非ともがんばっていただきたいと思

います。

進路室かいわい

進路指導部長 佐藤 貞夫



津高同窓会記念講演会

進路室には毎日毎日沢山の荷物が入り込んでくる。模試の問題、大学案内、入試要項、各種情報雑誌等々、整理したかと思つた次の荷物が来る。資料や情報の洪水で、運び屋稼業が進路指導部の主要任務なのかと錯覚してしまう。

進路室の先生方に、階から三階まで掲げていただく。この作業が大変で、そのうち腰痛患者が出るのではないかと心配だ。心配なくらいなら送らさず、と言つても見えるが、中には重要情報もあり、

最後の救済の場所であるはずの地獄も失われてしまいました。自らが犯した罪を浄化し、帳消しにするための場所はどこにもないのです。それならば、地獄すら失われようとして時代に、私たちがどのように生きるべきなのでしょう。

魯迅の小説「傷逝」で、自分の弱さゆえに妻を死に追いやった主人公は、悔恨の中で次のように申します。

「本心に魂というものが、地獄というものがあればと願う。もしそれがあつたらば、たとえ地獄の劫風が怒号する中であつても、妻を探し、彼女の目の前の悔恨と悲しみを述べ、救済をせよとせよと願うが。」

全国高校総体(漕艇の部)ダブルスカル第六位入賞!

福森 智子 (三年一組)
花井 孝子 (二年二組)



インターハイ出場までの道のりは長かった。残された一年間で目標のインターハイ出場を果たせるのか不安だった。常に自分達の意識を高め、休みもなく毎日力尽きるまで頑張った。練習の厳しさを思うと決まっていた六日目には緊張のあまり胃が痛くなるほどだった。その甲斐があつて念願のインターハイ出場にたどりつくことができた。

九月の校外模試の結果によれば、偏差値分布がきれいなおわん型ではなく、かたがたラッタの背中の形をしているのが気にかかる。低い方にも一山あつて、それがまた高い方へ傾けていない。

多少エンジンのかかり方が遅いようにも思うが、十月に入った辺りから意欲的な面構えに変わってきたようにも見えるのは、ヒキ目なのであるか。

学校制度の廃止がはつきりした。本校の九十四入試は従来通りの総合選抜が行われるが、九十五入試は単独選抜になる予定である。これからの高校にとって一番大事なこととは個性的な顔を持つことである。どのような顔を持つか、生徒や教師、地域・父母の期待は多様であるから、私はこう思うという意見を出し合うことが大切である。校内組織として「津高の将来を考へる小委員会」もでき、生徒会も意欲的な取り組みを続けよう

増加の一端をたどってきた高卒者数は、九十二年度をピークに減少に転じ、数年間で四分の三になるという。大学進学率は(特に女子において)今後も伸び続けている。このことから、その大幅でないものの、志望倍率は減少している。言い換えれば入り易くなるわけだが、そこに「入りたい大学」選びの現実性がある。

現在、各大学は国公立、私立を問わず、魅力ある大学作り懸命である。九一年に「大学設置基準」が改正されて、大学改革がし易くなり、戦後の学制改革以来の大改革が進んでいる。多少揶揄気味に言えばサバイバルゲームの観がある。大学と名が付けば学生の集まった時代は過ぎて、今や意欲的な大学、個性のない大学、活力のない大学は生き残れない。

「入りたい大学」目指して、今年三年生もがんばっているが、

「入りたい大学」目指して、今年三年生もがんばっているが、

「入りたい大学」目指して、今年三年生もがんばっているが、

「入りたい大学」目指して、今年三年生もがんばっているが、

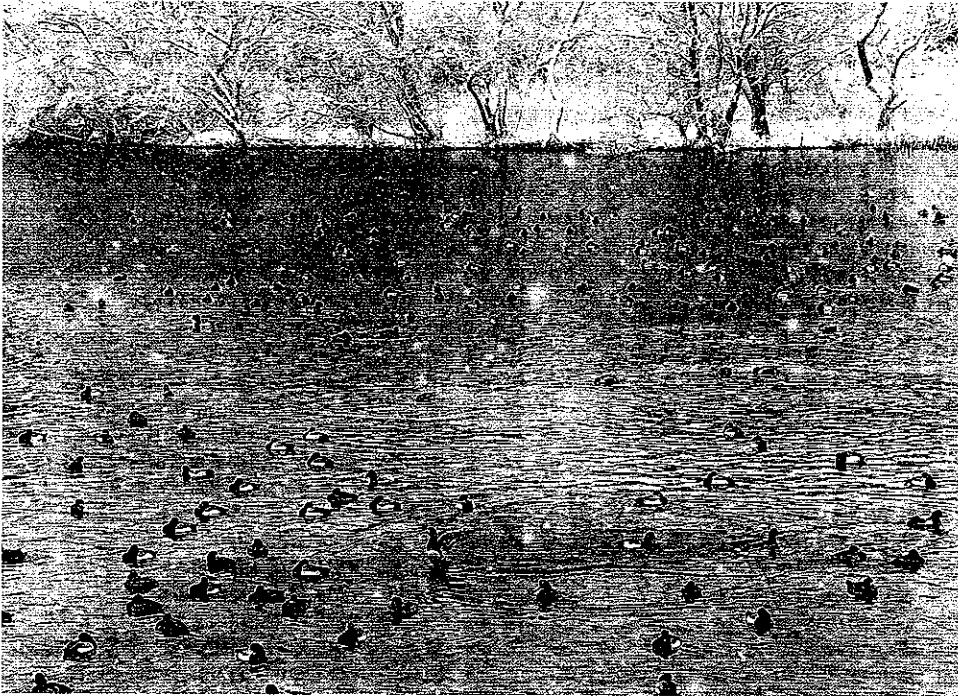
「入りたい大学」目指して、今年三年生もがんばっているが、

(平成5年度入試大学合格者数)

	国立	公立	私立	短大
H5年度	204	24	851	79
H4年度	184	33	720	67
H3年度	193	31	812	91

(平成5年度入試 主要大学合格者数)

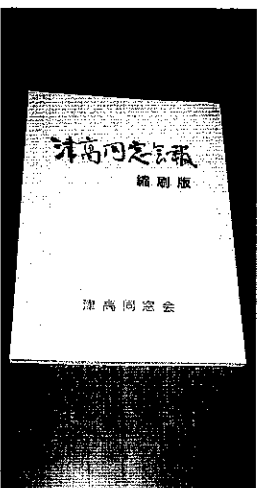
	東大	京大	阪大	神大	慶大	上野	中京	東大	日大	明大	立教	法政	早稲	愛知	愛知	中京	南山	皇学	龍谷	近畿	同志	立命	関西	三重														
H5年度	4	4	1	2	2	6	7	8	6	75	14	9	4	0	6	3	17	5	18	16	19	9	2	10	13	13	22	24	19	57	29	19	60	21	47	44	15	20
H4年度	2	2	2	2	2	1	7	15	7	72	6	3	3	1	3	4	12	9	11	6	19	17	5	7	14	21	25	18	20	34	24	10	37	30	39	37	18	33
H3年度	3	3	1	2	3	4	4	10	19	45	6	12	3	2	7	7	22	8	12	17	29	12	5	10	18	20	27	33	17	45	22	9	22	23	37	21	11	22



「春を待つ」津市岩田池にて 平まさる(昭和19年卒)

昭和三十九年報第一号が発刊されてから第三十号迄を一冊の縮刷版として去る七月刊行されました。

会報縮刷版発行



五〇〇冊の限定版です。価格は二千円です。購入ご希望の方は送料共二千三百八十円を添えて津高同窓会事務局へお申し込み下さい。

各地で同窓会開催

九州同窓会

本年五月十六日、第四回九州同窓会が例年通り福岡市天神のレス・トランで開催されました。

当日の参加者は、津からお越し頂いた会長・井坂校長・阿比子先生を含め二十一名でした。

会長挨拶のあと、井坂校長より母校の近況報告があり、遠くに住んでいるだけに懐かしさ、後輩の活躍振りをお聞きしました。

お知らせ

平成六年版同窓会名簿発刊

一五周年を記念して平成六年十一月下旬に名簿が発刊されます。前回と同様姫路市の株式会社サト(日本名簿出版株式会社改め)に依頼しました。

調査カードが発送される予定です。価格五千円。予約制をとりまして、調査カードに捺印してお申し込み下さい。

なお、本校同窓会と全く関係のない業者の同窓名簿の販売にご注意下さい。本校の名簿発刊案内には、必ず同窓会長名が入り、返信先が学校になっております。

京都同窓会

文化の日の十一月三日、例年の下鴨川の森から今年も会場を岡崎に移して、京都同窓会の第二十七回総会を開催した。

大阪同窓会 第二十七回大阪同窓会と懇親会が十一月十四日(日)に恒例の阪神百貨店グリーンルームで二三三名の出席を得て盛大に開催されました。

東京同窓会 例年通り十一月二十三日、「故郷と青春」をテーマに、総数四百名(学生百五十名)の出席を得て平成五年度同窓会が豊ヶ岡ヒル東海大学校友会館で行われた。

平成七年秋に 野球部創部百周年 記念行事

平成六年同窓会 講演会とパーティーを計画



平成六年同窓会は昭和三十六年・四十八年の卒業生が担当

日向市から参加の昭和三年卒の桐山先生のお元氣な言葉で乾杯。会食を来年を約して終了。

名古屋同窓会

第四回津高名古屋同窓会懇談会が去る六月五日に名古屋駅前の一ホテルキャッスルプラザで開催されました。

大阪同窓会

加藤会長が、今年三十年の記念同窓会であり、新規会員百名余を加え総数四百四十名の組織になったことを含め挨拶があった。

東京同窓会 例年通り十一月二十三日、「故郷と青春」をテーマに、総数四百名(学生百五十名)の出席を得て平成五年度同窓会が豊ヶ岡ヒル東海大学校友会館で行われた。

卒業五〇周年記念 津中一八会 伊豆大会開催

昭和十八年卒業生によるクラス会(津中一八会)は、去る四月十八日、伊豆修善寺に五十二名が集い、米本宏・三好清・山中文夫の三先生をお招きして盛大に開催された。

お詫び

編集委員会